

私にも 言わせて! 第93回

臨床から 公衆衛生の世界に飛び込んで



宮崎県高千穂保健所
所長
坂元 昭裕

平成16年宮崎医科大学(現宮崎大学医学部)卒業。同大学第3内科入局。24年宮崎大学医学部附属病院卒後臨床研修センター助教。28~29年Mahidol University大学院留学(Master of Public Health)。宮崎大学医学部助教(附属病院呼吸器内科)を経て、31年4月宮崎県に入庁。令和2年4月より現職。

呼吸器内科医として臨床を続けていましたが、少しずつ興味が強くなった公衆衛生の世界に昨年飛び込んでみました。まだまだ右往左往している新人ですが、俯瞰的な視点を持って取り組むこの分野に面白さを感じています。特筆するようなものはありませんが、これまでの歩みをまとめてみました。同じように公衆衛生分野に興味を持つ方が増えればうれしく思います。

はじめに

公衆衛生とは何かと問われると、自分の言葉ではなかなか明快に答えることができません。よく言われるのは「公衆の生命・生活を衛(まも)る」とあり、Winslowによれば、それはScienceであり、Artであるとされています。なんとなく高尚でかっこいい響きがし、自分とはかけ離れた分野に思っていました。が、どういう流れかこの世界に足を踏み入れ、保健所に勤務する公衆衛生医師になりました。「治療」から「予防」へ、「個人」か

ら「集団」へ、「生体内の変化」から「社会の仕組み」へ、「病院」から「地域/国/グローバルな単位」へ。臨床医から公衆衛生医師になったきっかけとこれまでの歩みを振り返ってみます。

公衆衛生への興味は 臨床の現場から

学生時代、公衆衛生学は最も関心の薄い教科だった気がします。そもそも熱心に講義を聴く学生ではありませんでしたが、特に公衆衛生学の講義は見事なほど記憶に残っていません(ごめんなさい)。

直接経験させてもらい感謝しています。また、国立保健医療科学院での3か月間の研修も貴重な経験になりました。多彩な経歴の20人ほどの研修同期生は、その後も情報交換、悩み相談など、大切な公衆衛生医師の仲間です。

保健所業務を学びつつ、個人的に興味のある輸入感染症の勉強に取り組み始め出した今年1月、新型コロナウイルス感染症の発生、感染拡大が日に日に大きく報道されるようになりました。国内でも感染の広がりに対策が急がれる中、2月下旬より本庁の感染症対策室兼務となりました。3月に入り宮崎県でも感染者が発生し、未曾有の危機に対する対応の難しさを実感する毎日でした。そして、4月より高千穂保健所に赴任し現在に至ります。

新型コロナウイルス感染症流行と 公衆衛生

この原稿を書いている今(令和2年5月中旬)、新型コロナウイルス感染症は100年に一度ともいわれる世界的大流行となつてしまいました。幸い日本では当初の

たきつけになつたと思います。

公衆衛生学を学んだ 大学院留学

公衆衛生を学問として学んでみようと思ひ、2016年、タイ・バンコクにあるMahidol Universityの大学院(MPH:公衆衛生学修士)へ留学しました。疫学、生物統計学、医療政策学、行動科学/健康教育、環境保健学/労働安全衛生といった公衆衛生学の土台となる5分野に加え、リーダーシップ論や組織管理学などを学びました。座学の他にコミュニケーション入りの地域診断などを経験し、フィールドに出る面白さを実感しました。また、学位論文のために「高齢者肺炎球菌ワクチン接種に関わる背景因子」をテーマに疫学調査を行い、調査分析による課題抽出の大切さを学びました。帰国後は、留学前と同じく大学

流行は収まりつつあります。しかし、まだまだ分からないことこの多し。この感染症によって社会活動がこの先どのようなのか、想像もつきません。医療のみならず、経済、教育、文化、観光、人権等、あらゆる分野が大きく影響を受けています。世界を見渡しても程度の差はあれ、ほぼすべての国や地域、人種が大変な思いをしています。

山間の小さな保健所にいながらも、各国のウェブサイトや論文、メーリングリストや個人のおつて等により、置いていかれないよう情報収集をする日々です。新しい情報を得て世界の情勢を正しく把握するためには、多角的・大局的な視野が大切だと思っています。これは、日頃の保健所業務において、総合的でバランスの取れた感覚が大事であると感じています。もともと医療や健康を俯瞰的に捉える眼を養いたいと思ひで公衆衛生を学んだ私には、この分野で働くやりがいを感じています。

保健所の公衆衛生医師として、地域の課題抽出、解決への取り組み、関係機関との連携など、日頃



教員として臨床と教育の日々に戻りました。学生への臨床講義では、講義内容の呼吸器疾患に加え、それとなく公衆衛生の面白さを伝えるようになりまし。臨床に役立てようと思ひ公衆衛生を学びに留学しましたが、そのうち実務として現場に出たいと思うようになりました。また、10か国45人の留学時のクラスメートが世界各地でそれぞれの公衆衛生フィールドで活躍しているのも励みになりました。振り返ると、留学の経験が公衆衛生医師に方向転換した大きなきっかけだったと思います。臨床を離れるのは大きな決断でしたが、思い切って公衆衛生の世界に足を踏み入れてみることにしました。

公衆衛生医師になつてから

宮崎県の公衆衛生医師になり1年少しがたちます。病院と異なる環境、仕事内容も異なることから、スーツとネクタイに慣れないスタートでした。実務の知識、経験がない中、赴任先の保健所の皆さんには丁寧にご指導いただきました。足手まといになりながらも、現場へ同行し保健所業務の実際を